

耐久性浮魚礁漁場の流況特性^{*1}

鹿熊信一郎・太田格

1. 目的

パヤオ漁業の漁況は流れの影響を強く受ける。また、漁獲量を左右する設置位置選定に流れの情報是有用である。このため、2001年4月現在沖縄県周辺海域に14基設置されている耐久性浮魚礁(ニライ)で長期間流速を観測し、主要パヤオ漁場の流況特性を調べた。

ニライでの流況は、①潮汐(鹿熊¹⁾)、②風(鹿熊²⁾)、③中規模渦²⁾(鹿熊・森永³⁾)、④黒潮・黒潮反流変動^{1) 2)}(鹿熊⁴⁾)の影響を受けていることがわかつてきている。潮流については、調和解析をおこない、ニライ1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 9号の調和定数を求めた(鹿熊⁵⁾、鹿熊⁶⁾)。吹送流については、本報「耐久性浮魚礁漁場の吹送流」に整理した。ニライでの観測は1点の観測であるが、同時に実施した海洋レーダ観測と比較した結果(鹿熊ら⁷⁾、鹿熊ら⁸⁾)、そのパヤオ漁場の流況をほぼ代表していると考えられた。今回、ニライ10, 11, 12, 13, 14, 15号

における潮流調和定数を求め、25時間以内の短周期変動を把握するとともに、全ニライの日平均流の流況特性を調べた。

2. 方法

測機はワイヤー、チェーン、鋼管により浮体の水深4m部に取り付けた。ニライは浮体水中部に方向舵があり、流れに対し一定の向きを保つ構造をしている。流速計は、浮体潮上側、水中部の柱から約2.5m離れるように取り付け、浮体による流れの乱れの影響を小さくするようにした。ニライ12, 13, 14, 15号では、風向風速も測定し、他の観測値とともに通信衛星を使って毎時研究室にデータを送信した(鹿熊⁹⁾)。1995年6月から観測を開始した。測定は大部分1時間に1回、一部20分間に1回実施した。観測日数はニライにより異なり125~1612日、延べ6801日だった。2001年3月末時点のニライの配置及び構造模式図を図1に示した。

ニライ名	北緯(分)	東経(分)	ニライ名	北緯(分)	東経(分)
ニライ1号(知念南東)	25°59.50	128°00.50	ニライ9号(与那国南西)	24°21.75	122°53.42
ニライ2号(宮古南)	24°27.60	125°06.60	ニライ10号(国頭東)	26°31.00	128°25.75
ニライ3号(久米島北東)	26°40.40	126°56.80	ニライ11号(中城湾東)	26°09.53	128°09.63
ニライ5号(金武東)	26°21.40	128°18.70	ニライ12号(西表北)	24°33.13	123°48.33
ニライ6号(石垣南)	24°09.60	124°20.60	ニライ13号(粟国北)	26°40.05	127°09.80
ニライ7号(本部西)	26°48.74	127°26.63	ニライ14号(伊平屋西)	27°10.00	127°34.30
ニライ8号(糸満南)	25°53.61	127°41.01	ニライ15号(宮古北西)	25°05.72	125°00.65

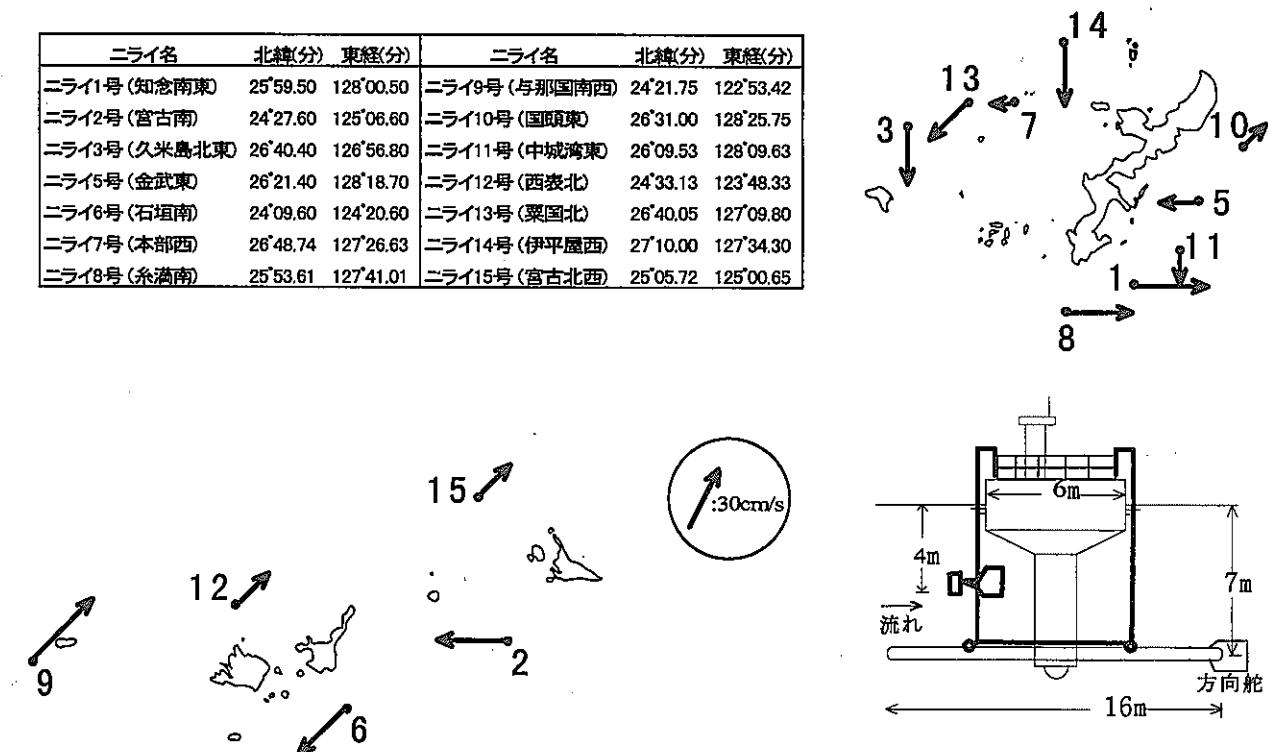


図1 ニライの配置図、構造模式図、各ニライの最多流向・その平均流速

*1 海洋構造変動パターン解析技術開発試験事業の一環

当初、直径6mmのステンレスワイヤーロープを、滑車を使いループ状に張って測機を固定したが、滑車の部分でワイヤーが切断される事故が続いたため、ステンレスチェーンとリングの組み合わせに変更した。データの回収、電池の交換は測機を浮体上に引き上げておこなうが、漁具等がチェーンに絡まり、引き上げられないことも多かった。このため、2000年4月より、ニライ2, 6, 9号ではセンサー(DCS3500)をケーブルとチェーンで固定し、データメモリーと電池は浮体上に固定するシステムに変更した。ニライ12, 13, 14, 15号は鋼管でセンサーを固定した。

3. 結果

ローター式のRCM7は、漁具の干渉(縄が絡まる、ローターが破損する等)を受け、流速が測定できないことが頻繁にあった。この場合でも、流向、水温は測定できた。また、電池の不良により測定されるべき期間にデータがとれていない事故が4回あった。ドップラー式RCM9はおおむね良好に測定できたが、センサー部の小さなキズからの浸水による流速データの不良が1回(約5ヶ月)、DSU(データ記録装置)の不良による欠測が1回(約3ヶ月)あった。DCS3500もおおむね良好に測定ができるが、原因不明の記録異常が1回(約20日)あった。衛星通信システムは、記録装置のある浮体内部への浸水、原因不明の理由により、流速・水温が欠測・不正になる事故が

表1 各ニライの流速・水温測定期間 N1：ニライ1号。点線は流速不正または欠測。矢印は観測継続中。

頻繁に起きた。この結果、適正と思われる流速値が得られたのは、ニライにより78~1325日、延べ5825日だった。

表1に各ニライの年別測定期間を示した。

各ニライの1時間間隔測定値につき、1年間を1-3月、4-6月、7-9月、10-12月に分け、水温、流向、流速、流速北方成分、流速東方成分をグラフ化した(3ヶ月でA4用紙1枚)。25時間移動平均値についても同様のグラフを作成した。

マイクロソフト社のExcel2000、ジャストシステム社の花子10を用い、マクロを作成して各二ライの1時間間隔流速スティック図を作成した(鹿熊¹⁰⁾)。25時間移動平均値についても同様のスティック図を作成した(約4ヶ月でA4用紙1枚)。また、ベクトルは時系列で横に並べたが、東西方向の流速成分が卓越する場合は見にくくなるため、縦に並べたスティック図も作成した。

ニライ10, 11, 12, 13, 14, 15号の潮流調和定数は、前回⁶⁾と同じ方法で求めた。表2に主要4分潮を含む8分潮の潮流調和定数を示した。表3に、ニライ別に全測定期間の平均流速(1時間測定値のスカラーピーク)と32日間推算潮流の平均流速、その比を示した。

図2に、各ニライの日平均流のスティック図を示した。各ニライの全測定期間の日平均流成分、8方位流向、その平均流速を図3に示した。

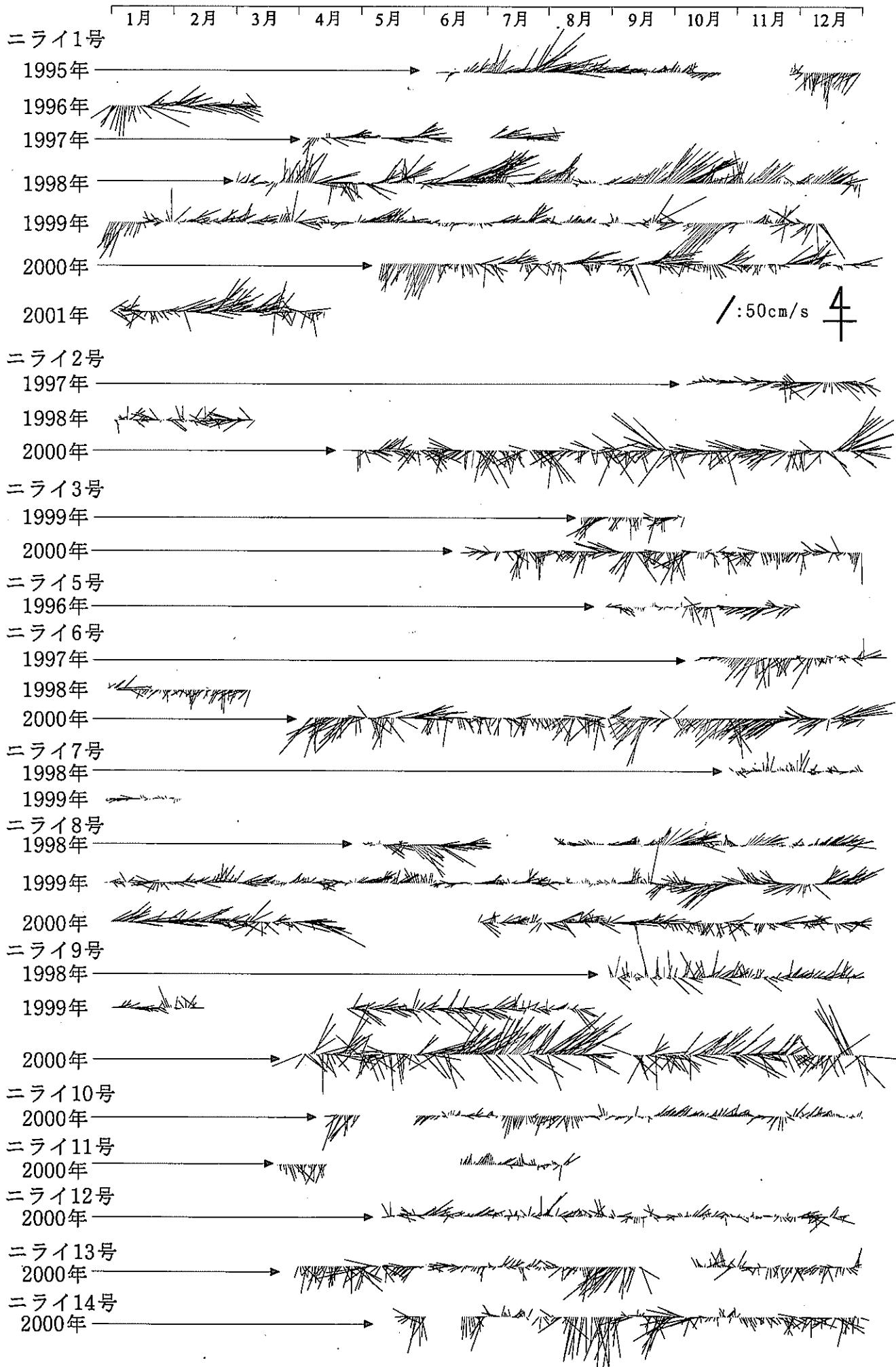


図2 各ニライの日平均流スティック図

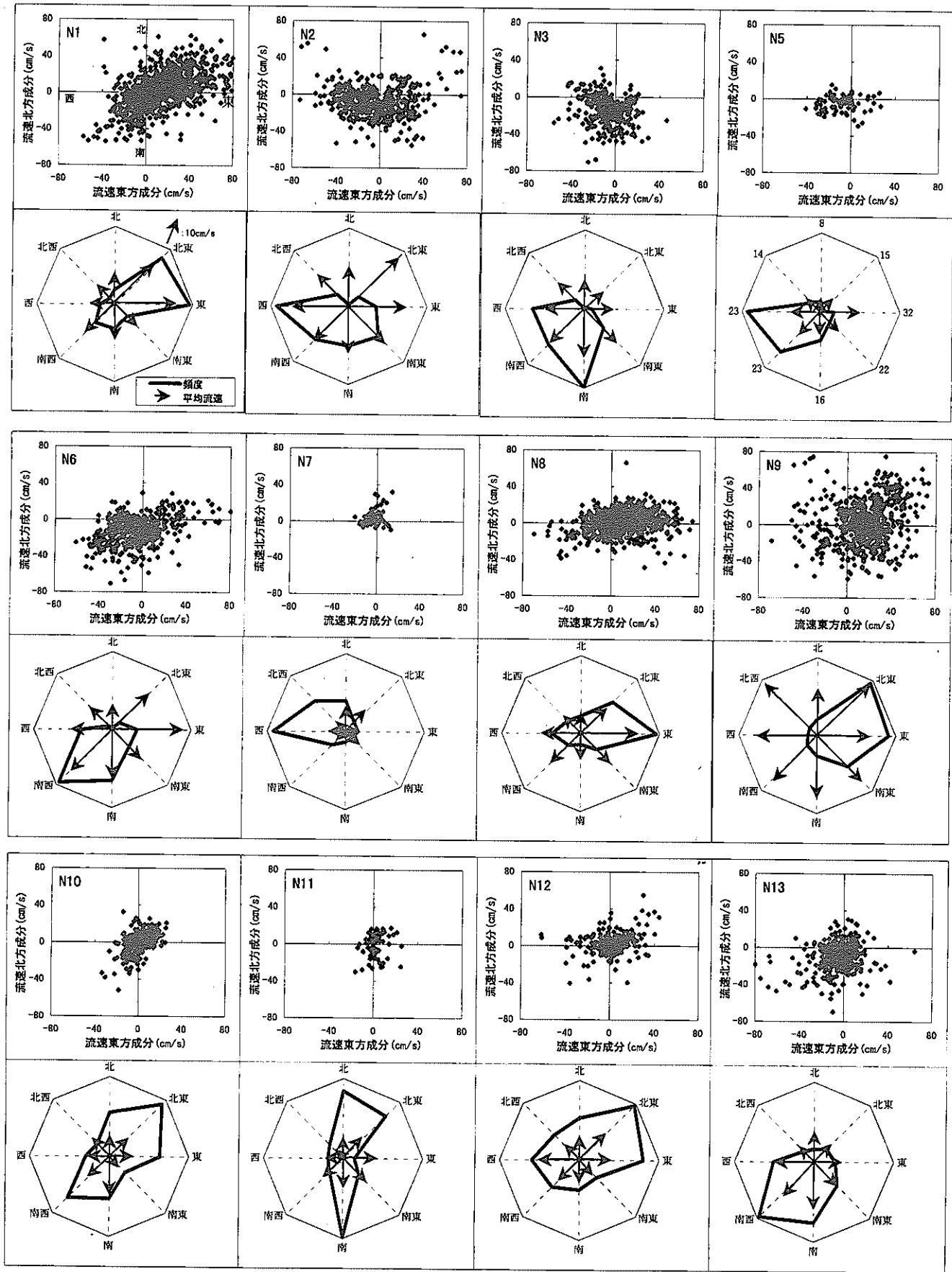


図3 各ニライの日平均流速成分・流向頻度・平均流速

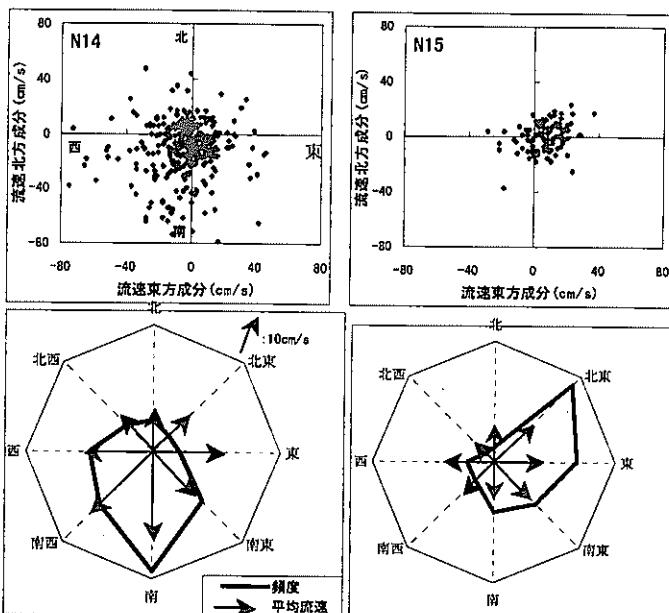


表4 各ニライの観測日数・平均流速・変動係数・
最多流向・その頻度と平均流速

ニライ	観測日数 (日)	観測 期間	平均流速 (cm/s)	変動係数	N	E	最多 流向	頻度 (%)	平均流速 (cm/s)
1	1325	周年	25.4	0.7	0.9	E	30	31.9	
2	477	周年	27.4	0.6	0.9	W	28	29.4	
3	320	7-3月	22.5	0.7	0.6	S	34	24.2	
5	97	8-11月	14.3	0.5	1	W	35	15.6	
6	497	周年	26.5	0.6	0.9	SW	34	30.1	
7	101	11-2月	8.8	0.9	0.7	W	35	8.7	
8	880	周年	21.3	0.5	1	E	32	29.0	
9	645	周年	31.8	0.8	0.7	NE	29	38.2	
10	309	5-3月	12.6	0.9	0.8	NE	22	13.1	
11	78	6-8月	12.8	1	0.6	S	27	15.2	
12	264	5-12月	14.9	0.8	1	NE	22	18.5	
13	390	周年	19.3	0.8	0.8	SW	28	22.7	
14	344	周年	22.2	0.9	0.8	S	27	26.9	
15	98	3-6月	15.3	0.7	0.8	NE	29	17.9	

図3 各ニライの日平均流速成分・流向頻度・平均流速(つづき)

表2 ニライにおける潮流調和定数 N:北方成分、E:東方成分、V:振幅(Knot)、K:遅角(°)

分潮名		ニライ10号		ニライ11号		ニライ12号		ニライ13号		ニライ14号		ニライ15号	
		V	K	V	K	V	K	V	K	V	K	V	K
O1	N	0.019	217	0.028	84	0.014	332	0.075	142	0.072	307	0.062	277
	E	0.034	293	0.004	262	0.035	162	0.063	218	0.047	64	0.025	270
K1	N	0.052	234	0.095	343	0.022	248	0.039	346	0.143	300	0.111	95
	E	0.068	326	0.071	31	0.037	304	0.021	64	0.080	22	0.154	276
P1	N	0.017	234	0.031	343	0.007	248	0.013	347	0.047	300	0.037	95
	E	0.023	326	0.023	31	0.012	304	0.021	64	0.027	22	0.051	276
M2	N	0.067	353	0.039	122	0.083	300	0.062	270	0.058	299	0.051	227
	E	0.021	111	0.034	351	0.091	20	0.080	39	0.051	115	0.015	67
S2	N	0.046	64	0.043	210	0.043	333	0.026	344	0.120	24	0.008	65
	E	0.026	185	0.011	256	0.028	57	0.038	90	0.067	145	0.026	80
K2	N	0.012	64	0.012	210	0.012	333	0.007	342	0.033	24	0.002	65
	E	0.007	185	0.003	256	0.008	57	0.010	90	0.018	145	0.007	80
M4	N	0.019	160	0.021	118	0.011	101	0.014	331	0.029	258	0.013	166
	E	0.010	247	0.010	112	0.015	140	0.011	75	0.016	78	0.012	15
MS4	N	0.028	295	0.012	188	0.010	319	0.010	4	0.018	342	0.013	171
	E	0.016	27	0.010	242	0.006	303	0.012	237	0.042	186	0.013	144
流速計		RCM7		RCM7		DCS3500		DCS3500		DCS3500		DCS3500	
平均回数		1		1		1		3		1		1	
1日/半日		1.01		1.53		0.46		0.97		1.16		3.19	

表3 調和解析期間の平均流速と推算潮流の平均流速 単位:cm/s

	ニライ10号	ニライ11号	ニライ12号	ニライ13号	ニライ14号	ニライ15号
平均流速	15	16	16.9	24.9	26.8	22.5
潮流流速	5	6	5	5	9	5
比率	34%	35%	30%	20%	32%	24%

表4に、各ニライの観測日数、主な観測期間、平均流速、流速成分変動係数、最多流向、その頻度と平均流速を示した。流れの変化しやすさを見るため、

流速成分の標準偏差と平均流速との比をとり変動係数とした。数値が大きいほど変化しやすい。(図1に、各ニライの最多流向とその平均流速を示した。)*1

*1 日平均流について各種グラフを作成した：各ニライの日平均流の流速、北方成分、東方成分(1年間でA4用紙1枚)；各ニライ、各年の流速成分XYグラフ(夏期・冬季の季節風の影響がわかるように色分けした、1年間・全ニライでA4用紙2枚)；各ニライ各年の日平均流成分、8方位流向、その平均流速(1年間・全ニライでA4用紙2枚)。

4. 考察（各ニライ漁場での流況特性）

ニライ1号：知念南東。最も長く流れを測定した地区である。1995年～1999年の時間平均流の速さは34cm/s(日平均流速より大きくなる)、推算潮流流速は5cm/s(平均流速の15%)、半日周潮より日周潮のほうが大きい⁶⁾。北東～南西方向の流れが多いが、これはこの方向に等深線が並ぶ海底地形に関係していると思う。季節風により冬は南向き、夏は北向きの流れとなることが多い、これは他のニライ漁場にも同じことが言える(本報「耐久性浮魚礁漁場の吹送流」参照)。8方位日平均流最多流向は東、頻度は30%で、その平均流速は31.9cm/sだった。他のニライ漁場も含め、最多流向の流速は、全方位の平均流速よりも大きかった。変動係数は流速北方成分が0.7、東方成分は0.9だった。北東への流れの頻度も高く平均流速も大きかった。ニライ1号で東や北東の流れの時は、西側のニライ8号でも東の流れとなっていることが多かった。那覇～先島間を往復するフェリー「飛龍21」のADCP観測結果では、この時、その西側の海域も強い東流となっていることが多く、黒潮から派生した流れと推測された¹⁾(水温もニライ8号→ニライ1号の順で西から急に上昇することが多かった⁹⁾)。中規模暖水渦の北側に位置することで、東～北東の流れが強化され、1Kt以上の強い流れとなる可能性もある。想定される吹送流を除いた流速北東方成分には37日の周期があった²⁾。

ニライ2号：宮古島南。時間平均流流速は25cm/s、推算潮流流速は10cm/s(41%)だった。半日周潮のほうが大きい。ニライ2号は宮古島の南西約50km、水深1200mの地点に位置するが、14のニライ漁場のなかで最も潮流の比率の高い漁場である⁶⁾。東～西の流れが多かった。沿岸漁場整備開発事業による中層パヤオ設置事業では、1地区につき3基のパヤオを卓越する流向に直角に並べる計画である。この漁場では南北方向に並べることになる。最多流向は西だった。宮古島南方には宮古沖冷水渦が存在することが知られており、NOAAの海面水温画像やTOPEX/POSEIDON海面高度画像でも確認できる。常時同じ場所に存在するわけではないが、他の中規模渦と比べると、長期間当海域に存在する傾向

がある。この漁場で西の流れが多いのは、この渦の影響だと思う。

ニライ3号：久米島北東。時間平均流流速は25cm/s、潮流流速は9cm/s(36%)だった。黒潮反流域に位置するため、南よりの流れが多くなった。最多流向は南、頻度は34%で、その平均流速は24.2cm/sだった。

ニライ5号：金武東。97日間しか流速を測定していないが、8～11月に測定したため、偏った季節風の影響は少ないものと思う。時間平均流流速は16cm/s、潮流流速は4cm/s(26%)だった。東～西方向の流れが多く、流速は全般に小さかった。最多流向は西だった。

ニライ6号：石垣島南。時間平均流流速は19cm/s、潮流流速は4cm/s(34%)だった(最新のデータを加えると時間平均流流速は27cm/s)。北東～南西方向の流れが多く、最多流向は南西だった。南西の流れが多いのは、宮古沖冷水渦の影響だと思う。

ニライ7号：本部西。101日間しか流速を測定していない。11～2月の測定のため、季節風の影響を受けたものと思う。時間平均流流速は12cm/s、潮流流速は4cm/s(19%)だった。最多流向は西で、全般に流速は小さかった。

ニライ8号：糸満南。時間平均流流速は20cm/s、潮流流速は6cm/s(29%)だった。東～西方向の流れが多く、変動係数も流速北方成分の0.5に対し、東方成分は1.0だった。最多流向は東だった。ニライ8号での流況は、東方に位置するニライ1号の流況と似ているが、時々両者が異なり、間に潮目が形成されることが海洋レーダの観測で確認された。この際、水温フロントが形成されることもあった⁸⁾。当海域が西の流れになる時は、冷水渦が接近していることが多い(本報「沖縄島南方の中規模渦と湧昇現象」参照)。想定される吹送流を除いた流速東方成分には36日の周期があった⁹⁾。

ニライ9号：与那国島南西。時間平均流流速は21cm/s、潮流流速は5cm/s(24%)だった(最新のデータを加えると時間平均流流速は34cm/s)。最多流向は北東だった。14漁場で唯一黒潮流軸が位置することがあり、その際は北東の強い流れとなる。黒潮流軸の東西移動には約1ヶ月の周期があった(鹿熊・

森永¹⁰)。黒潮流軸が西に寄ると南東の流れになる傾向があった。流速北方成分・東方成分をスペクトル解折した結果、各々16日、18日の周期があった。流速は全般に速く、全ニライ漁場で最大だった。

ニライ10号：国頭東。時間平均流流速等は表3に示した。全般に流速は小さく、北東一南西方向の流れが多かった。最多流向は北東だった。

ニライ11号：中城湾東。78日間しか流速を測定していない。6-8月の測定なので南よりの季節風の影響を受けたものと思うが、南よりの流れが多かった。全般に流速は小さく、流向も不安定だった。最多流向は南だった。

ニライ12号：西表島北。264日間流速を測定したが、冬季に流速計が不調となつたため、5-12月の測定である。季節風の影響を受けたものと思う。全般に流速は小さく、流向も不安定だった。最多流向は北東だった。黒潮の影響を受けていた可能性もある。

ニライ13号：粟国島北。最多流向は南西だった。黒潮反流域に位置するため南～南西の流れが多いが、西南西に位置するニライ3号や北東に位置するニライ14号で南流が多いのに比べ、南西流が多かった。想定される潮流、吹送流を除いた流速東方成分に12日、20日、24日の周期があった(本報「耐久性浮魚礁漁場の吹送流」)。

ニライ14号：伊平屋島西。最多流向は南だった。黒潮反流域に位置するため、南-南西の流れが多い。

ニライ15号：宮古島北西。2001年3月末に設置されたため、測定日数は98日と短い。3-6月の測定なので季節風の影響はそれ程大きくないと思う。最多流向は北東だった。黒潮の影響を受けていた可能性もある。

5. 今後の課題

ニライ5、7、11号等観測日数の短い漁場では、流向流速観測を継続し、より精度の高い情報を得る必要がある。

ニライ10、11、12、14、15号の潮流調和定数は、1回の32昼夜データから求めたものである。データが蓄積された後、数回分を平均処理する必要がある。

文 献

- 1) 鹿熊信一郎(1997)：耐久性浮魚礁周辺の流況と漁況。平成7年度沖水試事報。99-102.
- 2) 鹿熊信一郎・森永健司(2000)：沖縄島南東パヤオ漁場の残差流。平成10年度沖水試事報。61-63.
- 3) 鹿熊信一郎・森永健司(2001)：沖縄近海における中規模渦の動向。平成11年度沖水試事報。52-56.
- 4) 鹿熊信一郎(1998)：パヤオ漁場調査。平成8年度沖水試事報。23-25.
- 5) 鹿熊信一郎(1999)：海洋構造変動パターン解析技術開発試験事業・パヤオ漁場調査。平成9年度沖水試事報。55-62.
- 6) 鹿熊信一郎(2000)：海洋構造変動パターン解析技術開発試験事業・パヤオ漁場調査。平成10年度沖水試事報。58-60.
- 7) 鹿熊信一郎・前田訓次・増田悦久・灘井章嗣(1997)：海洋短波レーダーによる流況観測とパヤオ漁況について2。平成7年度沖水試事報。86-87.
- 8) 鹿熊信一郎・藤井智史・佐藤健治・藤家亘(2000)：短波海洋レーダによる流況観測とパヤオ漁況について3。平成10年度沖水試事報。64-66.
- 9) 鹿熊信一郎(2001)：海洋構造変動パターン解析技術開発試験事業・ニライテレメトリー・システムの構築。平成11年度沖水試事報。45-48.
- 10) 鹿熊信一郎(2000)：表計算・描画ソフトによる流速ベクトルの図化。平成10年度沖水試事報。67-68.
- 11) 鹿熊信一郎・森永健司(1997)：那覇-石垣間ににおける流況とパヤオ漁業について2。平成7年度沖水試事報。92-95.